

日本語の相づちの頻度とタイミングに関する総合的考察

A General Study of the Frequency and Timing of Backchannels in Japanese

羅 希[†], 定延 利之[‡]
Xi Luo, Toshiyuki Sadanobu

[†]神戸大学 (院生), [‡]神戸大学
[†]Kobe University (Graduate Student), [‡]Kobe University
[†]luckyrarecosmos@gmail.com
[‡]sadanobu@kobe-u.ac.jp

Abstract

In this presentation we investigated Japanese backchannels in relation with precedent utterances. Through the experiments we conducted it was shown that the frequency of backchannels varies in accordance with the speed of the previous utterance made by the interlocutor. Utterances with rapid speed (faster than about 9 morae/s) are not apt to be accompanied by backchannels. It was also shown that comprehension and attitude toward the previous utterance affect the timing of backchannels. A speaker who does not comprehend the previous utterance well tends to hit her/his backchannel later than a speaker with full comprehension (but without any particular attitude of agreement/disagreement). A similar delay in hitting backchannels is observed for some speakers with an attitude of disagreement, but the timing of backchannels for disagreement depends largely on the individual. Some speakers even hit backchannels for disagreement faster than in other cases.

Keywords —Backchannel, Japanese, Frequency

1. はじめに

相づちの研究は、英語会話中の *yes*, *uh huh*, *fine*, *I see* などの短い発話に関する Fries の “single short utterance” [1]や Yngve の “backchannel” [2]にまで遡ることができ、日本でも 1980 年代から盛んになってきている。

これまでの多くの研究で指摘されてきたように、現代日本語共通語 (以下「日本語」) の相づちは他の言語に比べて会話中に頻繁に発せられる傾向があり [3], 一つの「思いやり」行動 [4]と見なされている。この考えを単純に発展させれば、「高頻度で

非単調な相づちは (少なくとも日本語において) 良いコミュニケーションにつながる」ということになる。実際、こうした考えのもとで、日本語学習者が相づちを打つ頻度が日本語レベルを測る尺度の一つとされたこともある [5][6]。

しかし、日本語学習者が来日して相づちが高頻度になり、形式のバラエティが豊かになったからといって、それでコミュニケーションの雰囲気が良くなるわけでは必ずしもない [7][8]。相づちが高頻度で非単調に打たれることと、会話の雰囲気が良いことは同一視できるようなものではない。

従来の相づち研究は、「そもそも相づちとは、相手とのコミュニケーションの中で、インタラクティブな状況に埋め込まれた形で発せられるものだ」という認識が、十分透徹されているようでいて、実は必ずしもそうではなかったのではないか? というのは第一に、「相づちが相手の先行発話 (速度、内容に対する理解度や態度) にどのように影響されるか」という問題が追求されていないからである。また第二には、「相づちが相手の後続発話にどのように影響を与えるか」という問題も、僅かな研究 [9]を除けば取り組まれていないからである。

本発表では発表者らの先行研究 [10]を発展させることによって、上記の第一の問題の解決をはかりたいとするものである。

以下、第 2 節では相手発話の速度、第 3 節では相手発話の内容に対する理解度や態度に関して実験とその結果を示す。さらに第 4 節では、実験を通して得られた知見を、現実の自然会話における

発話と対応づける．第5節ではまとめである．

2. 相手発話の速度

相手発話の速度に関して，本発表では2つの実験とその結果を示す．

メイナードはPPU（ポーズによって区切られる語句）末付近で相づちが打たれやすいと指摘している[4]．メイナードは相づちの出現環境について傾向を述べるにとどまり，相づちの頻度には言及していないが，発話速度が遅いほど，単位時間内のPPUの数は多くなりがちではないか．たとえば早口に「それで田中さんと山田さんが相談して一緒にお金を出すことになって，」と言う場合と，ゆっくり「それで，田中さんと，山田さんが，相談して，一緒に，お金を，出すことに，なって，」と発音する場合を比べると，PPUの個数は後の方が遙かに多く，その差を覆すほどの早口は通常生じない．以上を単純に組み合わせると，発話の速度が遅いほど，その発話に対する相づちの量は増える傾向があるのではないかとも思われる．だが，これは本当に正しいのだろうか．また逆に，相手発話が非常に速い場合，相づちを打つことがためらわれ，頻度が低くなる可能性があると思われるが，これはこれまで言及・検証されていない．

そこで筆者らは，相手発話の速度が非常に速い場合と非常に遅い場合について，相づちの打たれやすさを調べる実験を行った．以下，この実験を実験1とする．

実験1では，同じ内容¹で異なる速度の3つの発話を被験者に聞かせ，それぞれの発話期間中に相づちが打たれる可能性・必要性があるかどうかを判断させた．3つの発話の呈示順序はランダムとした．最初の教示は「この発話に対して相づちを打てば，発話のペースを乱し，邪魔になるでしょ

うか」とし，作成した音声刺激を被験者に一度聞かせた．このように，その発話の継続時間内で相づちの出現が可能かどうかを判断してもらった．被験者が「邪魔になる」という判断をすればそのまま次の刺激を聞かせるが，被験者が「邪魔にならない」と回答すれば再度発話の音声を流して，それと同時に図1のような発話内容のローマ字（音声分析ソフト wavesurfer-1.8.8p4-win-i386 を用いて作成したもの）を被験者に呈示して，被験者に「相づちが打たれる時点」を選択させた（複数選択可能）．

被験者は20代から30代の日本語母語話者計20人である．実験の結果を図2に示す．図2の縦軸は，被験者が答えた，各発話における相づちの挿入可能箇所の総数である．

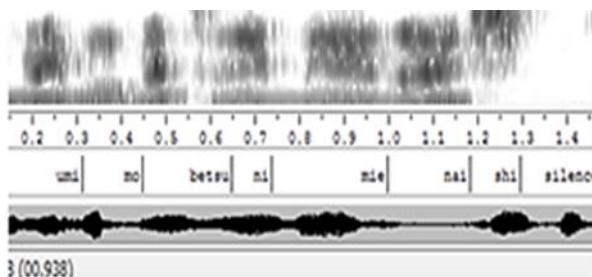


図1 被験者に呈示した視覚刺激

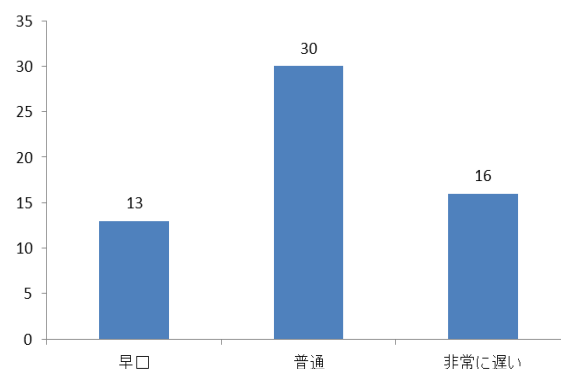


図2 実験1の結果

実験1の結果は，発話速度が「普通」の場合（平均発話速度²が7.4 モーラ/sの場合）相づちが最も打たれやすく，相手発話速度が非常に早い場合（9.9 モーラ/s）も，非常に遅い場合（4.2 モーラ

¹ 実験刺激に用いた発話は「海も別に見えないし，住宅街やし，学生もいっぱい通るしね」である．この発話はネット上で無料公開されている文字・時間情報付きの自然会話音声データベース Kobe Crest Flash (<http://www.speech-data.jp/taaba/kobedata/>) 内に実際に存在する．この発話を日本語母語話者1名（女性）に「早口」「普通」「非常に遅い速度」の3つの速度で自然発話のように明るいうつ調で読んでもらった．

² 平均発話速度の算出法は[11]にならった．すなわち「ポーズからポーズまでを発話時間としてその時間に何拍（大体仮名文字にして何個）入るか」を速度の単位（〇〇モーラ/s）とし，複数のポーズを含む一文では「全拍数をポーズの時間をのぞいた総発話時間で割ったもの」を「平均発話速度」とした．

/s) も相づちは打たれにくいというものであった。

しかし、この実験には問題がないわけではない。なぜかという、実験 1 で使用した刺激は、複数の節を含む「文」であり、「文内のポーズの長さをどう設定するか」という問題が避けられないからである。

実験 1 を行った際、発表者らはポーズの長さという変数をコントロールするため、各々のポーズの長さを一律に発話長全体の 9% に調整していた。しかし、それでも実験の結果がポーズの長さに影響されていた可能性がある。なぜかという、ポーズの長さが発話長全体の 9% 以外である場合にも実験 1 と同様の結果になるという保証はないからである。より精確な結果を得るために改めて実験を行った。以下、この実験を実験 2 とする。

実験 2 で使用した刺激は、実験 1 で使用した発話を改善したものである。実験 2 では、発話刺激を複数の節を含む文ではなく、途中でポーズの無い単一の節とした。より具体的には、実験 1 で使用した「海も別に見えないし、住宅街やし、学生もいっぱい通るしね」という文の中から文頭の節「海も別に見えないし」を選び、発話刺激とした。その上で、この節を「早口」「普通」「非常に遅い」という 3 つの速度で発した発話刺激を用意した。発話の速度は、「早口」が 8.9 モーラ/s³、「普通」が 6.5 モーラ/s、「非常に遅い」が 3.9 モーラ/s であり、発話者は実験 1 の発話者と同じである。被験者は 20 代から 30 代の日本語母語話者計 20 人であり、実験 1 の被験者とは重なっていない。

実験 2 では、異なる速度の発話に対して相づちを打つことの可否を被験者に判断させた。教示は「この発話に対して相づちの「うん」あるいは「はい」を打つと、後続発話のペースを乱し、邪魔になるかどうか判断してください」とし、作成した音声刺激を被験者に二度聞かせた。

次の図 3 は実験 2 の結果を示したものである。

縦棒グラフは 3 つの速度の発話において、被験者が判断した「相づちの挿入可能箇所の総数」を示している。

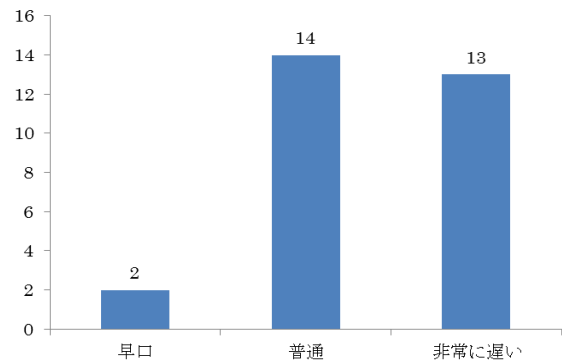


図 3 実験 2 の結果

この図を見ると、実験 1 の結果と同様に、「早口」の速度において相づちが打たれる可能性が最も低いことが分かった。それに対して、「普通」と「非常に遅い」の場合では、実験 1 と異なる傾向が見られた。実験 1 では「非常に遅い」の場合において挿入可能の相づちの個数は、「普通」の場合のおよそ半分でしかなかったが（カイ二乗検定で分析した結果、 $\chi^2(1)=6.021$, $p<.05$ ）、実験 2 では有意な差が出なかった（カイ二乗検定で分析した結果、 $p>.05$ ）。

実験 2 で「普通」と「非常に遅い」の間に差が見られなかったことは、実験 1 との大きな違いである。この結果は、阪田・広瀬の調査[12]に関わると考えられる。阪田・広瀬の調査によると、会話する際の発話速度は文頭ではやや遅く、文中（文の 1/3 あたり）になると速くなる傾向がある。このことからすれば、「非常に遅い速度」の発話は、長く（一節以上）続く場合は相づちが打たれにくい、文頭だけなら遅さが際立たず、相づちは打たれやすいと考えられる。

実験 2 の結果から、ポーズという変数を抜いた場合でも、実験 1 と変わらず「早口」の速度の発話に相づちを打ちにくいことが明らかになった。

3. 相手発話に対する理解度や態度

これまでの対照研究の結果を見ると、日本人は中国人や韓国人とは異なり、相手の意見にさほど賛成ではない場合でも頻繁に相づちを打つ傾向が

³「8.9 モーラ/s」という速度は少なくとも文頭の速度としては「早口」と考えられる。文頭の速度が文中に比べてやや遅いことに関しては後述の[12]を参照されたい。実験において被験者には刺激音声を「発話の始まり」として呈示した。

ある[13][14]. しかし, 相手の意見に賛成していない際の相づちは, 賛成する際と必ずしも同じタイミングで発せられてはいない. Pomerantz は, 相手の先行発話に非選好的反応をする際に, その反応が遅延する傾向があると述べている[15]. これが実際の日本語会話に当てはまるものなのかどうかを実験で調べた. 以下この実験を実験 3 とする.

図 4 は実験 3 で被験者に呈示したパソコンの画面である (<http://www.speech-data.jp/timing/>).

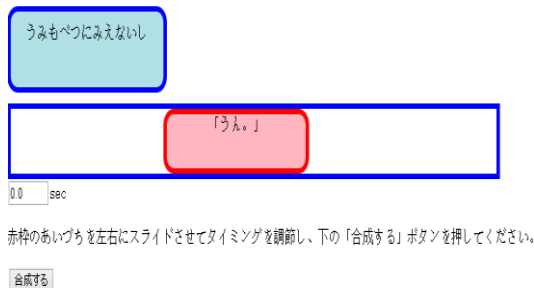


図 4 実験 3 の被験者に呈示された, 相づちのタイミング調節画面

図 4 で示しているように, 画面には青色発話(普通の発話)と赤色発話(相づち)がある. 青色発話の部分は固定されているが, 赤色発話の部分はドラッグ操作で自由に移動させることができ, したがって青色発話とのタイミングが自由に調節できる. 移動させた赤色発話は, 左下の「合成する」ボタンを押すことによって試聴・確認ができる. 最適と思われるタイミングができるまで被験者は調節を何度繰り返しても構わない.

課題としては, 青色発話に対する理解度・態度に関して 4 つの状況(図 5 に沿ったもの)を設定し, 発せられる赤色発話(相づち)のタイミングを被験者に調節してもらった. つまり:

- ①青色発話が理解でき, さらにそれに賛成する状況(以下, 「賛成」と呼ぶ)
- ②青色発話が良く理解できたがそれに賛成・反対するきもちは特に沸かない状況(以下, 「中立」と呼ぶ)
- ③青色発話が理解できたが, あまり賛成できない状況(以下, 「不賛成」と呼ぶ)
- ④青色発話が理解できなかった状況(以下, 「不

理解」と呼ぶ)

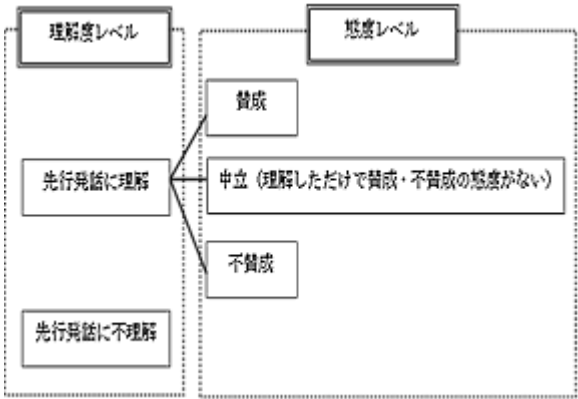


図 5 先行発話に対する理解度・態度の階層

TEST01	「うみもべつにみえないし」「うん」
TEST02	「なんかねびょうぶみたいなので」「うん」
TEST03	「とくにねやすみのひってね」「うん」
TEST04	「なつやすみにきたときにね」「うん」
TEST05	「すごいよこうこうぐらいからかみそめたりとか」「うん」
TEST06	「わたしびびあんすうすきなんですよ」「うん」
TEST07	「おねえちゃんいまいちゃったみたいやけど」「うん」

図 6 実験の発話ペア

被験者にはこのような調節を, 図 6 に挙げる 7 つの異なる発話ペアに対して行わせた. 被験者は 20 代から 30 代の日本語母語話者 16 人である.

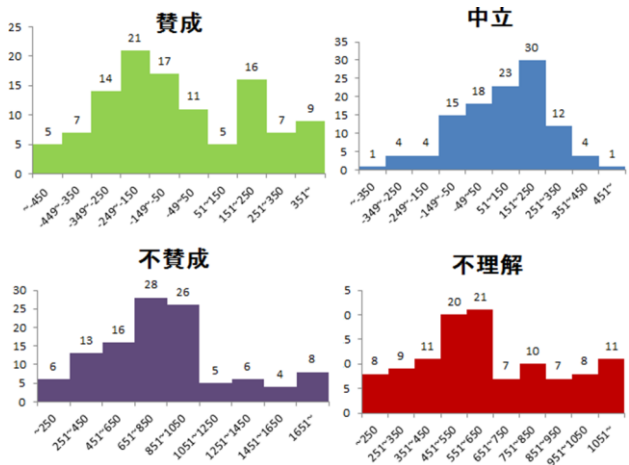


図 7 実験 3 の結果

実験の結果を分析する際に, 「賛成」と「中立」の状況では, 正の数値(相手発話と重ならない)も負の数値(相手発話と重なる)もある. t 検定や分散分析を行う際には, 負の数値を回避すべきである. 従って, 本発表ではデータを分析する際

に相手発話の終了する前に発せられる相づちと終了後の相づちに分けて行った。相手発話と重ならない場合分散分析を行ったところ、「賛成」「不賛成」「不理解」の間、「中立」「不賛成」「不理解」の間に有意差が見られた ($p<.001$)。また、相手発話と重なる場合 t 検定を行ったところ、「賛成」と「中立」の間に有意差が見られた ($p<.001$)。

図 7 は各理解度・態度において相づちの打たれるタイミングを示している。横軸はタイミングの区間であり、縦軸はそれぞれのタイミングの区間内における相づちの分布数である。図 7 に示したように、相手発話の終了時から 350ms 以前に打たれる相づちは、相手発話に対して「中立」あるいは「賛成」の可能性が大きく、350ms 以降に打たれる相づちは「不理解」か「不賛成」に結び付く可能性が大きいという結果が出た。

しかし、この実験 3 の設計に関しては、問題がないとは言えない。まず、1 人の被験者に 4 つの状況における相づちのタイミングを全て調節させるという設定において、タスクの負担が大きすぎる恐れがある。また、全ての被験者は「中立」→「不理解」→「賛成」→「不賛成」という順番で調節したため、順番を変えれば、実験結果も変わる可能性がある。これらの問題を踏まえ、新たな実験を行った。以下この実験を実験 4 とする。

実験 4 では、実験 3 と異なり、1 人の被験者は 4 つの状況における相づちのタイミングを全て調節するのではなく、ランダムに選ばれた 1 つの状況におけるタイミングだけを調節する。

被験者は 20 代から 30 代の日本語母語話者計 26 人である。実験 3 と実験 4 の被験者は重なっていない。実験 4 の結果を図 8 に示す。

図 8 も図 7 と同様、各理解度・態度において相づちの打たれるタイミングを示している。横軸はタイミングの区間であり、縦軸はそれぞれのタイミングの区間内における相づちの分布数である。図 8 にあるように、「中立」「不理解」「賛成」の 3 つの状況における相づちのタイミングは、実験 3 とほぼ同じ傾向が見られた。それに対して、「不賛成」の状況における相づちのタイミングは、実験

3 と大きなずれが生じた。実験 3 において「不賛成」の状況における相づちのタイミングは、650ms から 1050ms という区間に調節されたことが多いが、実験 4 ではそうではなく、非常に早いタイミングか、非常に遅いタイミングかという分極化した傾向が見られた。相手発話に対する中立・賛成の相づちは早く打たれ（相手発話の終了時から 350ms 以前）、不理解の相づちは遅く打たれる（相手発話の終了時から 350ms 以降）と言えるが、不賛成の際の相づちは一定の傾向がなく、話者によって非常に早く打たれるか、遅く打たれるかのどちらになる。中立・不理解・賛成の相づちのタイミングはある程度共通するが、不賛成の際の相づちは個人ごとに異なる。つまり非選好的な反応をする際に、Pomerantz[15]が述べているように遅れて相づちを打つ話者もいれば、相手発話が終わっていないうちに打つ話者もいる。前者は、相手の言っていることにあまり賛成できないので非否定的な応答詞「うん」を発するのに抵抗感を覚えて遅延するのではないかと推測される。

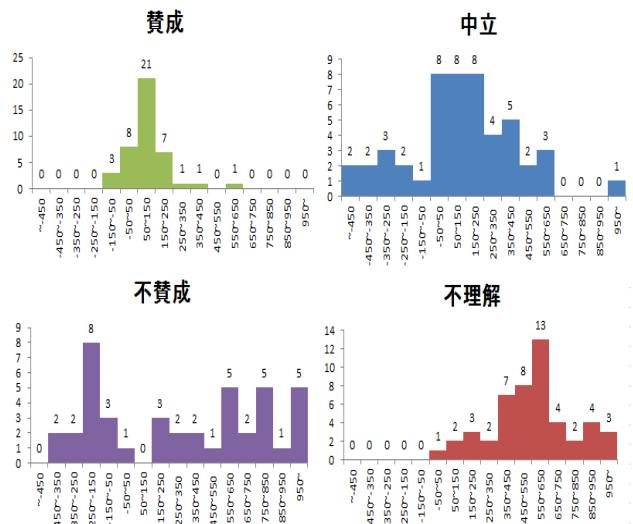


図 8 実験 4 の結果

4. 会話データの観察

以上の実験で得られた結果に対応するものは、現実の会話データにも見られるだろうか。以下、4.1 では、ある人物が複数の人と会話する際に打

った相づちの頻度が、相手発話の速度に影響されるかどうかを確かめる。4.2 では有標的⁴である遅れて発せられた相づち（相手発話の終了後から350ms以降に打たれる相づち）を抽出し、どのような原因で相づちが遅延したのかを観察する。

4.1. 発話速度と相づちの頻度

実験1と実験2の結果から、発話内容が同じであれば、「早口」の速度の発話に対して、相づちを打つことが非常に困難であることが分かった。そのことが実際の会話に反映されるかどうかを確認するために、発話速度が非常に早い（平均9モーラ/s以上）20代の日本語母語話者の女性AとSを研究対象とし、彼らが相手と会話する際の相づちの頻度と発話速度が普通の人と会話する際に比べて低くなるかどうかを検証した。検証する際は、できる限り同じ年齢層、同じ親密度の話者との会話に限定し、類似度の高い話題を選択した。また、実験では、相づちの「うん」と「はい」の形式で実施したため、検証の際も「うん」と「はい」だけ取り扱うようにする。

相づちの頻度を算出する際にはPPUという概念を使用した。メイナードはPPUをポーズによって区切られる語句という単位と定義しており、「その確認は客観的になされ得るので、分割の基準として使う際信頼できるものと思える」([4]p. 96)と述べている。本発表では「相づちの打たれる回数/PPUの個数」という方法で相づちの頻度を算出する。すなわち、相手発話の1つのPPUに対して相づちが何回打たれるかを調べる。

抽出した会話の断片の話題は、経験した出来事が述べられるという点で共通している。（以下「/」はポーズを表す⁵。）

断片1【会話の特訓】

1 H でたい(.)大連の↓:/

⁴ 岡登他らの調査によると、日本の会話における相づちの90%以上は相手発話の終了時から100msから300msの間に発せられる[16]。

⁵ ただし、本発表では話し手が自分の言い間違いを修復する際における0.2秒以下の空白は、ポーズとして扱わないようにする。

- 2 A うん
3 H ん外国語学院て[いうと]こ(.)大学って[いうとこ]に行って↓:/
4 A [うん] [うん]
5 H なんか社会人向けの↓[:/
6 A [うん]
7 H 会話の特訓[ていうのが]あってんやん[か/]
8 A [おお] [はいはい]
9 H それすごいお金使って[ね↑:/
10 A [うん]
11 H すごい使うのになんか知らんけど/[こ:]行くって言うてておか(.)
12 A [うん]
13 A うん
14 H [親にお/
15 A [うん]
16 H [お金もらって.]

断片2【猫】

- 1 S なんか/(.)そなんん最初分から[へんか]らさ:/
2 A [うん]
3 S .h ガタゴトって音するやんと外で/
4 S で(.)いやなんかおる(.)と思って/(0.6)で/(0.9)いや隣もでも両隣もみんな/(0.2)今日は帰ってる[はず]やしと思って/
5 A [うん]
6 S ガタゴトってまた音すんねんやで/.h.h
7 S へ: どうしよ[うと]思ってもうすごいこ:身を固くして/.h
8 A [うん]
9 S 待ってるやんそしたらしばらく音せんくなるからな: ↑/.h(0.4)なんやろうと思つて/(.)ドア開けるやん. /ほしたら,/そのときに猫は,/h ゴミ箱の中で↓:/色々作業[してはって]んな:/
10 A [うん]

断片 3【書き取り】

- 1 K あ前に後ね↑：なんか、／○○○○の部屋
に↓：／
- 2 S うん
- 3 K 行ったことがあってしばらく／
- 4 S うん
- 5 K [あの研究室でちょっとお留守番を／
- 6 S うん[うん
- 7 K [さして／(.)頂いてたことがあって／
- 8 S うん
- 9 K ○○○○もね↑：／意外となんかね↑：そ
ういう言葉を書き取って／
- 10 S うん
- 11 K 書き取ったり自分で作った言葉をなんか
紙に書いたりとかし[て／
- 12 S [うんうん
- 13 K 貼ってたりとか↓：／
- 14 S うん
- 15 K してましたね：／
- 16 S う：：ん

断片 4【混雑時間】

- 1 A じゃ：↓／(.)あのわたしが／(.)す(.)スチュ
ーデントで入ろうと思ってるんですけど
[夜七時]=
- 2 S [うん]
- 3 A =八時って言ったら：／どんなあの混んで
ますかって今よりもっと混んでますかっ
て聞いてあ僕その時間ちょっと入ってな
いんでね：↓／(.)って言われて[ね↑：／
- 4 S [うん
- 5 A んで：↓／
- 6 S @@@
- 7 A あそうですかって言って↓：／
- 8 S うん
- 9 A えっと何時かなじゃ朝(0.8)／
- 10 A 朝／(0.2)も混んでますかみたいな[こと
聞いた]んですよ↓：＝
- 11 S [うん]

12 A =[午前]中(.)って言ったら＝

13 S [うん]

14 A =あその時間はちょっと／(0.2)おじい
ちゃんおばあちゃん／(0.3)多いですね／

15 S あ

断片 1-4 における、相づちを打たれる相手の発話速度(モーラ/s)と相づちの頻度(回/PPU)を、次の表 1 にまとめる。

表 1 断片 1-4 の相手の発話速度と相づちの頻度

断片	1	2	3	4
相づちの打ち手	A	A	S	S
相づちを打たれる相手	H	S	K	A
相手の発話速度(モーラ/s)	7.2	9.3	7.9	9.9
相づちの頻度(回/PPU)	1.3	0.3	0.7	0.4

表 1 から、A も S も、発話速度が 9 モーラ/s を越える「早口」の相手(S・A)よりも、発話速度が 7-8 モーラ/s におさまる「普通」の相手(H・K)との会話の方が、相づちを高頻度で打つということが分かった。これらの会話では、「早口」の相手発話に対しては相づちは打たれにくかったということである。

4.2. 遅延した相づちに対する観察

実験 3 と実験 4 の結果に基づき、音声会話データベース Kobe Crest Flash の中から、遅延した(相手発話の終了後から 350ms 以降に打たれる)相づちを複数抽出し、観察した。これらの例を観察すると、遅延した相づちは会話において主に 2 つの場所に現れることを見出した。一つは、新規話題の導入部で、もう一つは相手の発話が一つの見解として完結した部分である。

4.2.1. 新規話題の導入部に現れる遅延した相づち

新たな話題の開始部に現れる遅延した相づちの代表的な例として以下の 2 つを挙げる。

断片 5【ドイツのマスタード】

- 1 O それでね(.)からしをね↓(.)マスタードを[ね：，
- 2 A [はい
- 3→O ドイツのマスタードね日本のマスタードみたいに辛いあんまり。

(1.3)

4→A う：：ん

5 O で(0.6)ちょっとクリーミーなんだね.

6 O それ(.)びろ：：[って

7 A [@@@@び(h)ろ(h)：：@@@

断片 6 【パニックになった時】

1 N だからその：：(0.2)本当にある人をこ：
判断する場合環境が↓：(1.0)あって(.)そ
の環境に↓：(0.6)原因があんのか(0.6)そ
の人自身に原因があんのか(0.4)見極めん
のすごい難しい[よ.

2 M [うん：：

3 N うむやっぱりだから(0.9)ん誰でもそうで
そのもう(0.3)無限に時間があって無限に
お金があったら(.)ゆったりするやん.

4 M そうですね.

(0.5)

5→N うん(.)だからそのパニックになったとき
にね↑

(0.6)

6→M はい

7 N こ：ぱっとお(0.3)例えば(.)お(0.8)おく奥
さんにぱっと覆い被さる(.)人のパーセン
テージなんか調べたらね(0.2)

8 N ひょっとしたら(0.5)か[なり＝

9 M [あ：

10 N ＝日本と中国で差が出んのんちゃうかな
思ってんねんけど(.)[どうやろ.

11 M [はい

この 2 つの断片において話者 O と N は会話の
主導権を持ち、A と M は聞き手である。断片 5
において、O はドイツに行ったことのない A にドイ
ツのマスタードを紹介し、「ドイツのマスタードは
日本のマスタードみたいに辛い」ということ
を A に説明しようとしていた。それに対して A が
遅延した相づちを發した理由は、ドイツのマスタ
ードを食べたことがなく、O の説明だけでその食

感がピンとこないからだと推測される

断片 6 も同じく、5N で「パニック」という先
行發話の内容とずれた新たな語彙が出てきたので、
M の反応がやや遅れたのである。この場合の遅延
した相づちは「不理解」の状況と結び付けられる
と考えられる。

Chafe は人間の意識の中にある情報を活性的・
半活性的・非活性的の 3 つの状態に分類している
[17]。活性的な状態の情報は、当該の瞬間におい
て話し手の意識の焦点となっている少量の情報で
ある。非活性的な情報は長期的な記憶で、利用可
能な大量の情報だが、その時点では焦点化されて
いない。両者の中間にある半活性的な情報は、さ
ほど焦点化されていないが、非活性的な情報に比
べて利用しやすいものであると定義されている。
そして發話によって活性的情報に置かれる情報を
新情報、發話時点で既に意識の焦点にある情報を
旧情報としている。上記の例をみると、「ドイツと
日本のマスタードの比較」「パニック」いずれも、
それまで言及されていない事物で、聞き手の A と
M にとって完全な新情報であったため、相づちが
遅延したのではないかと考えられる。

4.2.2. 相手發話が一つの見解として完結した部分
にある遅延した相づち

この類の相づちは、常に一つの話題がある程度
続いてから現れる。以下 2 つの例を挙げる。

断片 7 【造花】

1 N 人工的なもんで許せるもんって案外少な
くてね↑(0.4)僕ね人工的なもんで案外き
れいなあ思うのはね↑(1.3)あの商店街に
あの(0.8)ん造花の桜があるやんか大売
しなんかのと[きに↓

2 S [はいはい

3 N あれきれいと思う.=

4 S =うそ：[：@@@

5 N [ほんと(.)あっこまで行けば(0.9)
あのピンク(1.5)あれは許せる.

(1.0)

6→S うん.

断片 8【死にたい】

- 1 Y だからこ : (0.8)あの死にたいっていうよりも,h 死にすごい : (0.6)死というものに,
(0.3)
- 2 H うん
- 3 Y トートにかどうかわかんないけど死というものに,h すごいシンパシーを感じて,(0.4)寄[ってたんだと思うんです最後は.
- 4→H [うん
(1.3)
- 5→H うん

断片 7 の 6S と断片 8 の 4H・5H は 4.2.1 で挙げられた例と異なり、いずれも相手発話の一つの見解として完結した部分に発せられている。断片 7 の N は「造花の桜がきれいだ」と言った後、4S の反応「うそ : 」に対して「あそこまで行けば許せる」と、その理由も含めて述べており、ここで N の発話は一つの見解として完結したと考えられる。その後 6S は 1 秒経った時点でようやく相づちの「うん」を発している。断片 8 の Y は劇の登場人物の心理状態に関して、「最後は死にシンパシーを感じていたの、死に近づいていくのだ」と述べている。3Y は「すごいシンパシーを感じて」という発話で自分自身の見解を打ち上げ、それに対して 4H は 0.5 秒後に相づちの「うん」を発した。その後、Y は「寄ってたんだと思うんです最後は」と自分の発話を完成させ、それに対して 5H は 1.3 秒経った時点でようやく相づちの「うん」を打った。つまりこの断片で H は、相手の見解に対して遅延した相づちを合計 2 回打っている (4H・5H)。これらの場面にある遅延した相づちは「不賛成」の状況と関連性を持つ可能性が大きいと考えられる。

これは Pomerantz が主張した「非選好的応答が遅れる傾向がある」と関わっていると考えられる。断片 7 の 6S も断片 8 の 4H・5H も、話し手は相手が述べた考えに賛成の立場にはないので、相づ

ち「うん」が打たれる積極的な理由はないと言える。しかし、相手の発話に対して何も反応しなかったり、間を置かずに反論したりすれば、その場の雰囲気壊してしまう可能性が大きいので、相づちの「うん」を発したのではないかと推察される。

5. まとめ

本発表では日本語の相づちについて、①相づちの頻度・タイミングと相手発話の速度との関係、②相づちのタイミングと相手発話に対する理解度・態度との関係に関する実験を行い、以下 2 点を明らかにした。

第 1 点. 発話の長さが一節でも、複数の節の場合でも、速度が非常に早ければ、相づちは打たれにくい。それに対して、非常に遅い速度の発話は、複数の節で続けば相づちは打たれにくい、一節の場合はそうではない。

第 2 点. 相手発話に対する理解度・態度が異なると (「中立」「不理解」「賛成」「不賛成」)、相づちのタイミングはそれぞれ異なる。但し、「相手発話に不賛成」という場合だけは、遅れて相づちを発する人もいれば、相手発話が終わる前に非常に早い段階で発する人もいる。ここには大きな個人差が見られた。

謝辞

Kobe crest flash の利用に関して Nick Campbell 先生とインフォーマント諸氏にお礼申し上げる。また、実験の発案とツール作成に関して田畑安希子氏にお世話になった。お名前を記して謝意を表したい。本発表は日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究(A) (課題番号: 23242023, 15H02605, 研究代表者: 定延利之) の成果の一部である。

文字起こしに用いた記号

1. [] 複数の参加者の音声重なる期間
2. = 一つの発話において語と語の途切れが密着している

3. (m.n) 音声が続いている状態の長さ
4. (.) 0.2 秒以下の短い間合い
5. : : 直前の音声が続けられている
6. .h 吸気音
7. @@ 笑い
8. . 語尾の音が下がって区切りがついた
9. , 語尾の音が少し下がって弾みが付いている
10. ↑ ↓ 音調の極端な上がり下がり

参考文献

- [1] Fries, C. (1952) *The Structure of English: An Introduction to the Construction of English Sentences*. Harcourt, Brace: New York.
- [2] Yngve, V. (1970) "On getting a word in edgewise". *Papers from the Sixth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* pp. 567-577.
- [3] Clancy, P., Thompson, S., Suzuki, R. & Tao, H. (1996) "The conversational use of reactive tokens in English, Japanese and Mandarin", *Journal of Pragmatics* 26, 355-387.
- [4] メイナード泉子, (1993) 会話分析, くろしお出版.
- [5] 楊晶, (1997) "中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響—形態, 頻度, タイミングを中心に", *言語文化と日本語教育*, Vol. 13, pp. 117-128.
- [6] 佐々木泰子, (2002) "相談場面におけるあいづちの機能", *日本語学習者と日本語母語話者の談話能力発達過程の研究—文章・音声の母語別比較*, 平成 13 年度科学研究費補助金研究基盤研究(B)(1)研究成果報告書, pp. 24-33.
- [7] 羅希, (2014a) "中国人留学生が日本語に適応する過程の縦断的分析—留学一年間の相づちの使用状況の変化から", *言語と言語教育をめぐって*, Vol. 7, pp. 131-160.
- [8] 羅希, (2014b) "会話の雰囲気に影響する相づち: 留学生と日本人の会話データの観察より", *電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE technical report: 信学技報*, Vol. 114, No. 189, pp. 19-24.
- [9] 中里収, (2002) "あいづちのタイミングと話し手の発話速度との関係について", *言語・音声理解と対話処理研究会*, Vol. 34, pp. 57-62.
- [10] 羅希・定延利之, (近刊) "状況に埋め込まれた相づちの頻度とタイミング", *間合い JCSS SIG Maai*, Vol. 2015, No. 3.
- [11] 杉藤美代子, (1999) "ことばのスピード感とは何か", *言語*, Vol. 28, No. 9, pp. 30-34.
- [12] 阪田真弓・広瀬啓吉, (1995) "対話音声の韻律的特徴の分析と合成", *信学技報*, SP95-17, pp. 55-62.
- [13] Endo, T. (2010) "Epistemic stance marker as a disagreement preface: Wo jue de 'I feel/think' in Mandarin conversation in response to assessments", *京都大学言語学研究*, Vol. 29, pp. 43-76.
- [14] 李善雅, (2001) "議論の場におけるあいづち—日本語母語話者と韓国学習者の相違", *世界の日本語教育*, Vol. 11, pp. 139-152.
- [15] Pomerantz, A. (1984) "Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes." In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action*, pp. 57-101, Cambridge: Cambridge University Press.
- [16] 岡登洋平・加藤佳司・山本幹雄・板橋秀一, (1999) "韻律情報を用いた相づちの挿入", *情報処理学会論文誌*, Vol. 40, No. 2, pp. 469-478.
- [17] Chafe, W. (1994) *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: University of Chicago Press.